

大雨陰然益を覆すが如し其の行くに當りては意氣天を呑まんとし歸るに當りては寂々とて喪狗の如し一枚着物を雨に濕したる爲め毛布或は洋服を着る而して其の語る處を聞けば曰く狂没は惡運の強き奴なりと」

文苑

紀念會詩歌

寄松祝

八波則吉

もろ聲にいさたへなん立田山まつのみどりのふかきめくみを
大御代のふみのはやしの若松はさかえゆくへし千代も八千代も

第七回紀念會祝歌

吉九一昌

大君のめくみの露のうれしさはわれ身ひとりと思ふはかりそ
かしこしと今日こそ祝へ諸共に文よむまどをうちはらひつゝ

祝第七會紀念會

木村晋次郎

創業以來既七年。時清文運日隆然、鱗々層閣連雲勢、濟々多才出壑泉、
所極東西天地理。攸期内外古今賢、請看異日邦家任、總在青衿八百肩。

全

石川重治

萬里長天佳氣通。龍南潤處端雲籠。料知松竹千年色。坐自洋洋和氣中。

和歌

紅葉山なる秋山玉山富田日岳有馬白嶼三大人の

墓にまうでよよめる

朽木菴主

奥津城の篠の葉つゆもえるまらぬ昔偲の涙なりけり

高瀬尚によみて遣しける

陸奥の信夫の山のまのはれぬ雲の高峯を日に詠めつゝ

野の撫子を見てれもふ所をよめる

野をゆけはあらしの床にふしにけり見るも涙の大和なでして

諫早の山口生號をつけてよとこひければそのす

ゆる所の有明川にちなみて明湊とつけて與へけ

る心をよとける

山口をわきて昇れば溪深くありあけ川の水をすみける

旅宿雪

竹

軒

播磨路や旅寐の床の膚さむく今朝雪白し手枕の松

豊臣秀吉